

## 第13回

## 第2章 人間としての自覚—哲学・宗教・芸術

## 仏教 ～無常無我の真理～

## 今回学ぶこと

古代インドの宗教の中からあらわれたブッダの思想の特徴を、この世のすべては苦しみであるという真理から始まって、ではどのようにすればその苦しみを乗り越えて、楽しみの世界に入ると説いたのかという観点からとらえる。またブッダの教えがどのように仏教として成立し、拡大していったかを学ぶ。



講師

和田倫明

## ■ 古代インドの世界観 ■

ブッダの思想は、古代インド宗教思想から生まれた。古代インドの社会は、身分と職業が生まれつき定められているカースト制のもとに成り立っていた。古代インドの宗教は、あらゆる生命は生まれ変わりを繰り返すという輪廻転生の考え方に立っていて、厳しい修行を通じてこの永遠の生まれ変わりから脱することが解脱であり、救いであるとする一方、自分の人生は前世に定められていることになるから、苦しい生活を送る庶民にとっては、この考え方から救いを得ることは難しいことになる。

## ■ 「縁起の法」とブッダの思想 ■

ブッダ（ゴータマ・シッダッタ）はインドの地方国家の王子であったが、民衆の苦しみを救うために家族も身分を捨て、修行生活に入った。当時の有名な修行者について、数年間の苦行を果たしたが、悟りを開くことができなかった。山を降りて菩提樹の下で瞑想するうちに、悪魔の誘惑にも打ち勝って、悟りを開いたとされる。

ブッダの悟りは、四諦・八正道として示される。四諦とは苦諦（生老病死すべては苦しみである）・集諦（苦は煩惱から生じる）・滅諦（煩惱を消せば苦は滅する）・道諦（正しい修行法は八正道である）という、四つの真理である。八正道は、苦行にも快楽にも拠らない中道の修行法である。

すべてが苦しみとなるのは、縁起の法を悟っていないからだという。それは諸行無常（すべては生滅変化する）・諸法無我（すべてはそれ自体で存在しているのではない）

ということで、これらを悟ることによって涅槃寂靜（ねはんじやくじょう 穏やかな境地）にいたることができ

## ■ 仏教の成立と発展 ■

ブッダの入滅（死）後、教団は発展し、保護する国王もあらわれた。教義研究が進む中で、いくつかの流れが生じ、出家修行を重視する上座部仏教、在家でも救済に[あずか](#)れると考える大乗仏教などがあり、今日につながっている。

日本には、中国に伝わりそこでさらに独自の発展を遂げていた、大乗仏教が伝えられた。いっぽう、南アジアや東南アジアには、出家を重視する上座部仏教の影響が定着し、社会人が数か月出家して修行しては戻ってくる、というやり方などが見られる。

### ◇ コラム ◇

日本では、イエス・キリストの誕生を祝うクリスマスは、あたかも年中行事のように定着しているようだが、仏教徒が多いはずなのに、ブッダの誕生を祝う「花まつり」（日本では一般に4月8日）に参加する人は、必ずしも多くないようである。これは灌仏会などと言われ、誕生仏（右手を天、左手を地にむけている。生まれおちて間もないブッダが「天上天下唯我独尊」と言ったとされることから）の小さな仏像を、花御堂に入れて、桶に満たした甘茶をかける。ブッダが誕生した時、野原にいつせいに花が咲き乱れ、天からは甘露の雨が降り注いだ、というその様子の再現である。ところで、使いものにならなくなることを「おしゃかになる」というのは、「おだぶつ」と同じように、廃棄することを死ぬことに比して成仏にたとえたのであろうが、江戸っ子の鍛冶職人が失敗した時に「火（「ひ」が江戸なまりで「し」）が強かった」→「しがつよかった」→「四月八日」という言葉遊びから来ている、という説もある。